

※ 解答は、《解答欄》に書きましよう。

ポイント

- ・ 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いを想像すること。
- ・ 類義語についての意味や用法の違いに気づき、語感を磨くこと。

古典をテーマに自主学習に取り組んでいる田村さんは、次の文章を読みました。

江戸時代の笑い話を集めた『醒睡笑』の中に、「星取り」という話があります。
その話を平仮名と句読点のみで表してみました。仮名遣いは、歴史的仮名遣いのままです。

こぞうあり。さよふけて、ながさをもち、にはをあなたとなたとふりまはる。
ぼつずこれを見つげ、それはなにことをするぞとぞ。
さらのほしがほしさに、うちをとさんとすれども、おちぬといへば、
さてさてどんなるやつや。それほどさくがなつてなるものか。
そこからはさをかどくまい。やねへあがれといはれた。
おでしはともさふらく、ししやうのしなんありがたし。

これではどんな話なのか分かりづらいので、今度は、漢字仮名交じりで、また、現代仮名遣いで表します。
さらに、会話文には、かぎ（「」）を付けます。

まずは冒頭。「いつ、どこで、だれが、なにを、どうした」という状況設定が示されています。

小僧あり。小夜ふけて、長棹をもち、庭をあなたとなたと振り回る。

「いつ」は、「夜ふけ」です。「どこで」は、「庭」、おそらくお寺の庭でしょう。「だれが、なにを、どうした」は、「小僧が、長棹を、振り回した」となります。ここでのポイントは、「ちね」ではなく「長ちね」としている点です。子どもが長いさおを持てば、それだけでふらつきます。加えて、「あなたとなた」、つまり「あちらこちら」という表現。さおを振り回すというよりも、ちねに振り回されるようにして寺の境内を動き回る小坊主の姿が目に見えます。

次に展開部。ここで、「長棹を振り回した」目的が明らかになります。

坊主これを見つげ、「それは何事をするぞ。」と問う。

「空の星が欲しさに、うち落とさんとすれども、落ちぬ。」と言はば、



小坊主は、「星が欲しくて、うち落とそう」としたことが分かります。このあたりから、笑い話のおいがふんふんと漂ってきます。小坊主が「でも、うち落とすことができません。」と坊主につたえたところ、

「さてさて鈍なるやつや。それほど策がのつてなるものか。
そこからは棹が①届くまい。屋根へ上がれ。」と言われた。
お弟子はともさふらく、師匠の②指圖ありがたし。

これが「星取り」という話の結末、「落ち」です。作者は、(A) 以上にとぼけた内容の口にする (B) に対して、最後に、「その③指圖がありがたい。」と駄目を押し、話のこつけいさを強調しています。

【二ページ】

- 1 (A)、(B)に入る言葉を、それぞれ古文中の最後の一文から抜き出して書きなさい。
- 2 — 線部①「届くまい」を次のように言い換えます。()に入る平仮名三字を書きなさい。
届かない()
- 3 — 線部②「指南」、③「指導」について、先生と田村さんは次のように話しました。()に入る漢字一字を書きなさい。
先生 今も「指南」という言葉は使われます。「郷土料理を教える」を「郷土料理を指南する」と表したり、「剣術を教える人」を「剣術の指南」と表したりします。
田村 「指導」の場合、「指導者」、「指導員」、「指導係」など、別の漢字がついて初めて「指導する人」という意味をもちますが、「指南」はそれだけで「指導する人」という意味をもつんですね。
先生 そのとおりです。ただし、「者」や「員」、「係」ではない漢字を当て、「剣術の指南()」と表すこともあります。
田村さんは、図書館にあった『伊曾保物語』に興味をもち、その一節を次のようにまとめました。

古文	現代語訳(脚色あり)
<p>さる岡の上に、鶴と孔雀と遊ぶけるが、孔雀、その身の美しきに誇り、鶴に言ひけるは、「世の中に、鳥は多けれども、我が翼に及ぶものあらじ。絵に描く時は、筆にも尽くされじ。」などと誇りければ、鶴は、「憎し」と思へども、さあらぬ体にて、「なるほど、空飛ぶ鳥の中にて、御身ほど美しきものはあるまじ。さりながら、欠けたる事二つあり。まづ一つには、御足のきたなきは、錦を着て足に泥を付けたる如く、二つには、鳥といふものは高く飛ぶを第一の徳とす。しかるに、御身は飛ぶといふとも、遠く行くこともならず。これを思ふ時は、翼あつて翼なきが如し。御身、わづかの得に誇りて、大きな損のあるをわきまへずや。」と恥ぢしむれば、孔雀は一言半句もなく、すくすくして立ち去りける。</p> <p>そのごとく、我が着れに誇る時は、人まだ、その誤りを言ひ出づるものなり。</p> 	<p>ある丘の上での、鶴と孔雀の会話。</p> <p>孔雀(鼻高々に) 「世の中にいるたくさんの鳥の中で、私ほど美しい翼をもっているものはいないわ。私を絵に描こうとしても、美しすぎてだれも私を描ききることはできないもの。」</p> <p>鶴(内心) 「自慢ばかりして、いやな感じだなあ」</p> <p>鶴(と思ふものの、あえて平然と) 「言われるとおり、空を飛ぶ鳥の中で、あなたほど美しいものはいないでしょうね。でも、あなたにはよくないところが二つあるわ。一つ目は、あなたの足が汚いこと。まるで、豪華な着物を身にまといながら足に泥を付けているようなものよ。二つ目は、鳥にとっての最大の魅力は、空高く飛ぶことなのに、あなたは遠くへ行けないわね。翼はあるけれど、まるで役に立たないわ。あなたは、わずかな長所を誇って、大きな欠点があることに気づいていないのでは。」</p> <p>恥ずかしくなった孔雀は、一言も発することなくすくすくと立ち去った。</p> <p>このように、()。</p> 

- 4 この文章の最後の一文は、教訓に当たります。— 線部を参考にして、()に入る内容を、三十字以上、四十字以内にとめて書きなさい。

シート 27 解答欄

第 学年 組 番 氏名

1

A

--

B

--

2

--	--	--

3

--

4

30
40

シート 27 正答例

- 1 A 弟子 B 師匠
- 2 だろう
- 3 役(番)
- 4 (例) 自分のことを自慢ばかりしていると、周りの人はその欠点を見つけたがるものである
(38字)